

酒にスキー、雁木、文学…。上越ゆかりの文化を丸ごと学ぶ「学校」がこの秋、開講した。運営する上越市のNPO法人「頸城野郷土資料室」理事長の石塚正英さんは哲学・歴史学の研究者だ。生まれ育った同市と教授を務める東京電気大のある埼玉を月2回の講座開催のために往復。本日は毎週でも来たいほど、やりたいことがたくさんあるという。石塚「くびき野ストーン」復活、山間部での水車発電などさまざまな仕掛けの中で、人と文化の地産地消を目指す。(編集委員・渡辺英美子)



■頸城野郷土資料室が開講 認定されることで自分や地域にした「くびき野カレッジ」天 誇りを持ってほしいんです。い 地ひと は内容が盛りだく さんです。 9月から来年1月まで計10回コ ース。1回につき3コマ設けてい ます。1時間目は地理や歴史、2 時間目はものづくりの職人さんた ちの授業。3時間目はアラカルト。 2月に検定試験をやり合格者を での出前授業もやりたいと考え

先人の知恵再評価 生活に生かす

上越の文化継承へ「カレッジ」を開設 石塚 正英さん (頸城野郷土資料室 理事長・60歳)



いしづか・まさひで 上越市生まれ、さいたま市在住。立正大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程単位取得退学。東京電機大理工学部教授、立正大史学会理事。著書に「歴史知と学問論」「感性文化学入門」など。NPO法人頸城野郷土資料室は2008年4月設立。

ています。 ■生まれ故郷の上越に再び 深くかかわるようになった きっかけは、 20年ほど前、日照りの時にお地蔵様をため池に放り投げて降雨を祈る珍しい雨ごいが上越市三和地区で行われていることを知り、上越にフィールドワークに通うようになった。その雨ごい、最初は「お地蔵さんお地蔵さん、雨が降らな

は、人間は自然の前には無力であることを知っていた。ただ、こつこつと独特の儀礼だとして、伝えていかなければ忘れ去られてしまいます。 ■頸城野の風土や歴史、文化の継承を目指しているわけですね。 生活に根差した文化を再評価したい。合理性やハイテクだけで切り盛りするのはなく、地域に残り立っている。お互い寄り添い、補い合う、共用の精神も優れた生活の知恵です。

る先人の知恵、いわばローテクを現代の技術と融合させていくことが、資源問題と環境問題に直面した私たちの課題です。例えば私の実家は明治元年に建てられた町家ですが、多少の補強を経て今も十分住める。夏も風が通って涼しいですよ。それから高田の街に残る雁木は家々の軒先を連携し合う仕組み。朝市だつて通りを近隣の農家などに貸して成り立っている。お互い寄り添い、補い合う、共用の精神も優れた生活の知恵です。 ■頸城野郷土資料室では上越市特産の石材の活用や水車発電にも取り組んでいます。三和区の大光寺石、柿崎区の中山石、安塚区の切越石を「くびき野ストーン」と名付け、調査と再活用に取り組んでいます。コンククリートの普及以前は土蔵や神社の鳥居、雁木の敷石、風呂釜にも使われていました。凝灰岩で風化が比較的早い加工しやすい。ク